

三敷前遺跡発掘調査報告書

—神崎郡能登川町小川—

1983

滋賀県教育委員会  
財團法人 滋賀県文化財保護協会  
登川町教育委員会

# 三敷前遺跡発掘調査報告書

— 神崎郡能登川町小川 —

1983

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会  
能登川町教育委員会

## 序

滋賀県が行なう一級河川大同川改修工事予定地に散布地としての三敷前遺跡が遺存しており、事前に発掘調査を実施することになりました。その結果大中の湖縁辺部以外での縄文土器の検出、弥生時代の方形周溝墓、神崎郡条里の関係など狭い範囲での調査にもかかわらず広範な時期の貴重な資料を得ることができました。本報告書はその記録です。

この報告書により、郷土の文化財に対する認識や理解が高まり、さらに教育や学術的に少しでも役立つことを期待するものです。

なお、当調査にあたっては滋賀県八日市土木事務所をはじめ多くの関係者の方々の御協力を得、さらに本報告書作成にあたり努力くださった方々にも合せて深く感謝の意を表します。

昭和58年3月

滋賀県教育委員会文化財保護課

課長 外池忠雄

## 例　　言

1. 本書は、一級河川大同川改修工事および、その関連事業に先き立ち実施した能登川町三敷前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は滋賀県土木部河港課からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、側滋賀県文化財保護協会、能登川町教育委員会を調査機関として実施した。
3. 調査は滋賀県教育委員会文化財保護課主査近藤滋が担当し、能登川町教育委員会嘱託山本一博が現地調査を実施した。
4. 本書は山本が執筆、編集した。
5. 出土遺物や写真、図面については滋賀県教育委員会で保管している。

## 目 次

### 序

### 例 言

1. はじめに .....	1
2. 位置と環境 .....	2
3. 調査結果 .....	2
4. おわりに .....	6

### 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 .....	1
第2図 トレンチ配置図 .....	2・3
第3図 方形周溝墓実測図 .....	4
第4図 T5-Tg 実測図 .....	4・5

### 図 版 目 次

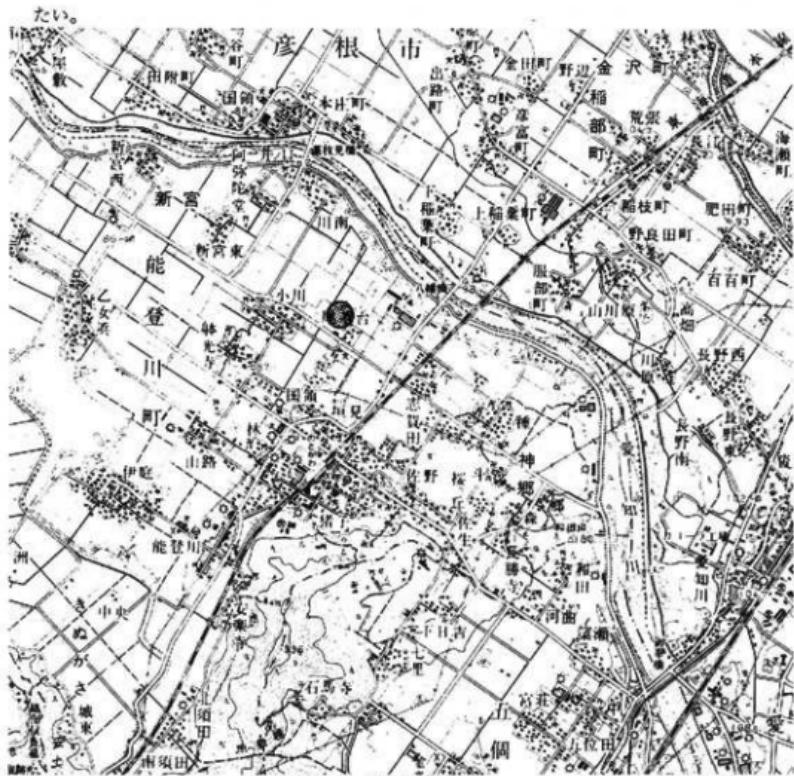
図版 1 上 SD 1 検出状況	
下 SD 2 検出状況	
図版 2 上 方形周溝墓検出状況	
下 弥生土器出土状況	
図版 3 上 Ta 全景	
下 Tb 全景	
図版 4 出土遺物	
図版 5 出土遺物実測図	

## 1. はじめに

本報告書は一級河川大同川改修工事に伴なう工事用仮水路敷(T 1~T11)、排水路工事予定地(Ta~g)に対して実施したもので、散布地としての当該遺跡の遺構の有無、範囲、遺存状況の確認を目的に実施した。

調査は昭和57年11月6日~12月11日までの現地調査期間を要したが、全体としてはトレーナー幅が狭く、かつ長大であったものの、結果としては以下に述べるとおりであった。

なお調査の実施にあたっては滋賀県埋蔵文化財センター技師松沢修氏の助言を得たほか多くの地元諸氏や補助員とし多く学生諸氏の多大な協力を得た。ここに記して謝意を表したい。



第1図 遺跡位置図

1 : 50,000

## 2. 位置と環境

三敷前遺跡は、国鉄能登川駅の北方ほぼ1.3km、大字小川地先に位置する。

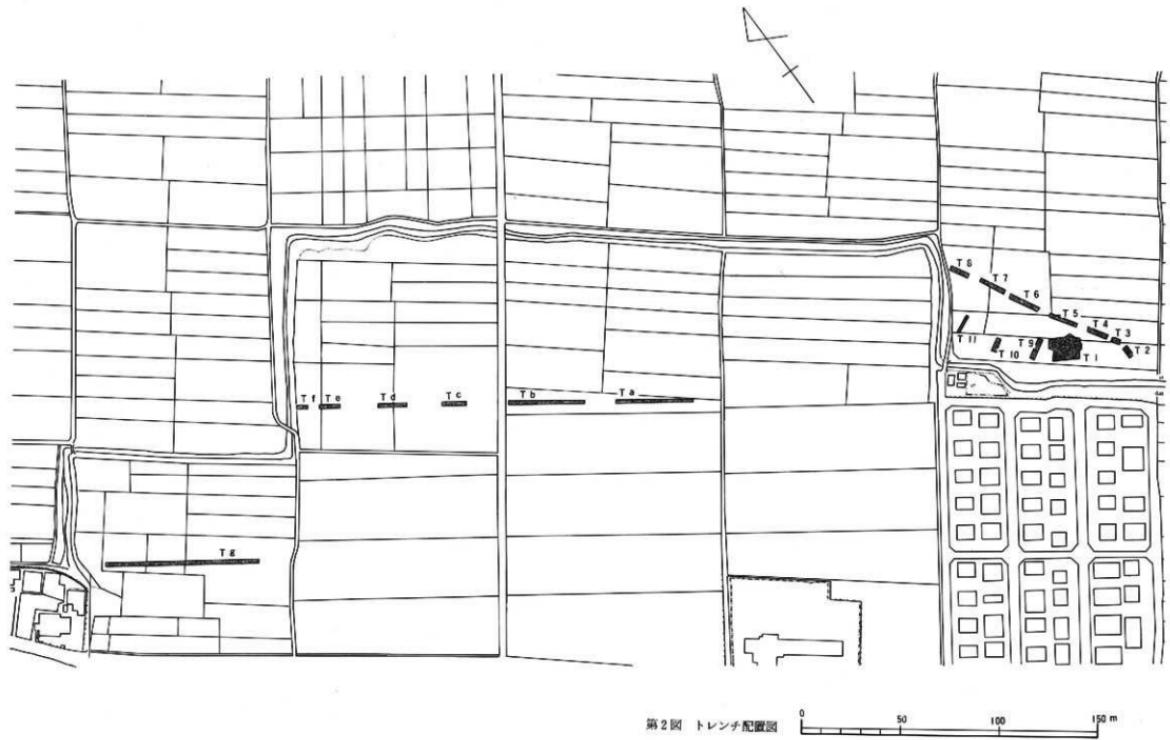
能登川町の大半は湖東平野を南東から西北に流れる愛知川の沖積地であり、旧大中の湖辺（現干拓地）に国指定史跡大中の湖南遺跡がある。しかしこの遺跡は後述するとおり、やや特異な立地であるといえる。現在までに確認されている町内60数ヶ所の遺跡分布を見ると、五個莊町境にある和田山の北端から、大字種→今→小川を通り躰光寺→山路→能登川→繖山と続くライン内側に、町内遺跡の大半が存在することに気付く。今回の調査地から西方約800mにある弥生時代中期～後期の宮の前遺跡、弥生時代後期～古墳時代の大集落中沢、斗西遺跡、白鳳時代の寺院跡で町指定史跡になっている法堂寺遺跡、平安時代末～安土桃山時代の中世集落猪子遺跡をはじめ、繩文時代～近世に至るまでの数多くの遺跡がこの区域に立置している。これはこの区域が舌状微高地になっているためで、昭和54年度の宮の前遺跡の調査でも、現在の小川集落の西端がこの舌状微高地の先端であることが確認されている。一方この区域以外の遺跡分布は、繖山に本拠を置いた守護大名佐々木六角氏配下の豪族館跡がほとんどである。

さて当該三敷前遺跡は、北に愛知川の後背湿地、南に上記舌状微高地が広がり、この両者の境界ラインにまたがって位置している。また周辺には、神崎郡条里の地割が良好な状態で遺存しており、遺跡名の由来となった小字「三敷前」は、復元神崎郡条里6条10里16坪に比定できる。中沢・斗西遺跡では、この条里方向と同一方向に建つ掘立柱建物が確認されており、今回の調査でも条里制に関する遺構等の検出が、先述舌状微高地の線引きとともに期待された。

## 3. 調査結果

全部で18ヶ所にトレンチを設けて調査を実施したが、その検出遺構・遺物は少量であった。主な検出遺構は、T 5 の方形周溝墓・T 5 の河川跡・Ta・b の土壙・Tg の溝などである。また出土遺物には、受口状口縁をもつて考えられる壺（?）のほか繩文土器・黒色土器をあげることができる。

以下にそれらの概略を述べる。



第2図 トレンチ配置図

## A 遺構

### (1)方形周溝墓

当初トレンチ掘りした T 1 で屈曲した溝状遺構として検出されたため、隨時拡張を重ねその全容を見るに至った。その規模は、外周で東西約9.4m×南北約9 m、内周で東西約7.4m×南北6.9m を測る。また周溝の最大幅は1.3m、深さは0.3m 程度である。

南西コーナー部で周溝は途切れるものの、この部分には周溝堆積土に類似する土層が少量残存しており、構築当時は全周する周溝をもつものであったと考えられる。また全体的プランとしては、東北—南西方向に短く、西北—南東方向にやや長いひし形状を呈する。

周溝内堆積土は、主に灰色系粘質土であったが、一部これに炭化物を含んだ土層が観察された。

出土遺物には、縄文土器（5）・打製石器（S 2）などがあるが、遺構それ自身の年代決定の材料となる遺物の出土はない。

### (2)溝

SD 1 T 5 の東側で幅6.5m にわたって検出している。5 m の間隔を置く T 4 では検出されておらず、少なくともその幅は12m を越えないものと考えられる。

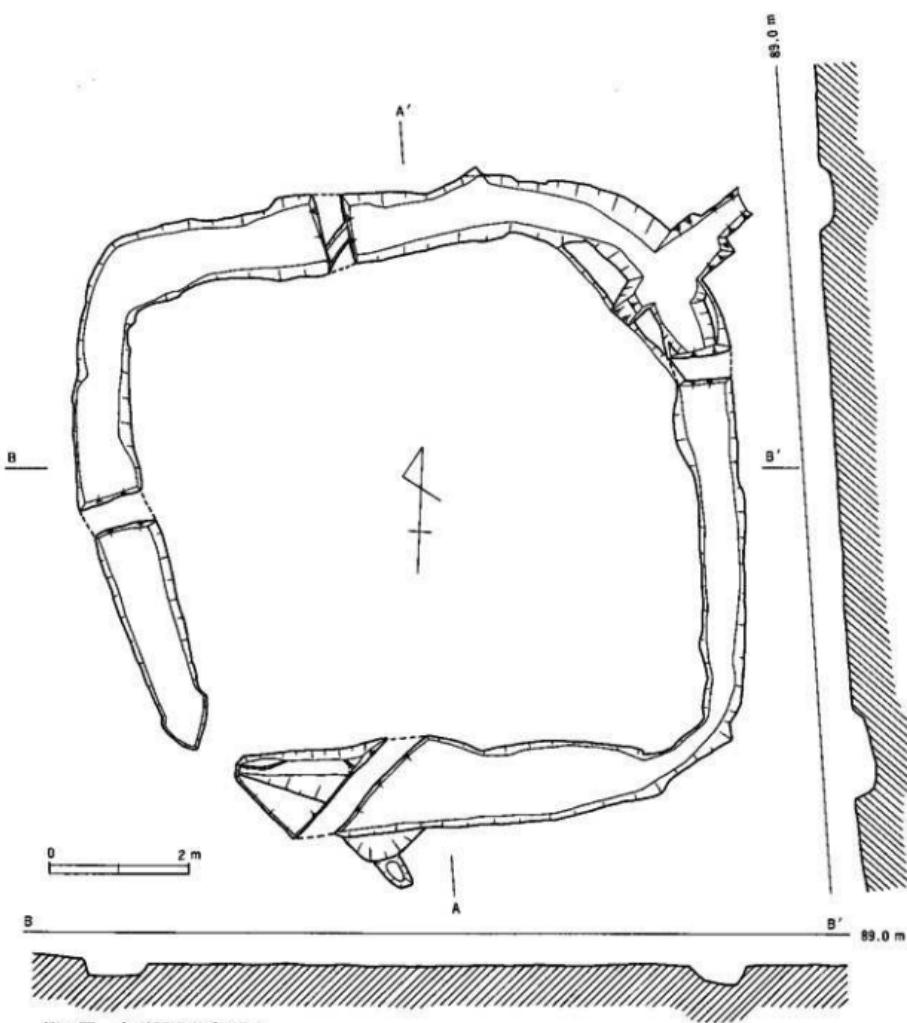
また、断面観察から、2 時期の流れが確認された。古い時期のものは、深さ約40cm、長さ約4.5m 認められ、新しい時期のものは深さ約60cm、長さ約 3 m を測る。堆積土層は、前者は褐色系の後者は黒灰色系の粘質土であった。

新しい時期の底部から、弥生土器（7）が出土しているほか、SD 1 出土遺物には他に受口状口縁の弥生土器（6）や磨製石斧（S 1）がある。

SD 2 Tg の西半部で、トレンチと類似する方向をもつ溝として検出されている。長さ約30m にわたって確認しているが、その幅は 2 m 以上で深さは約30cm を測る。

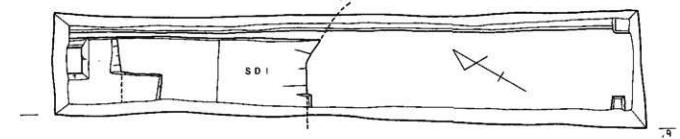
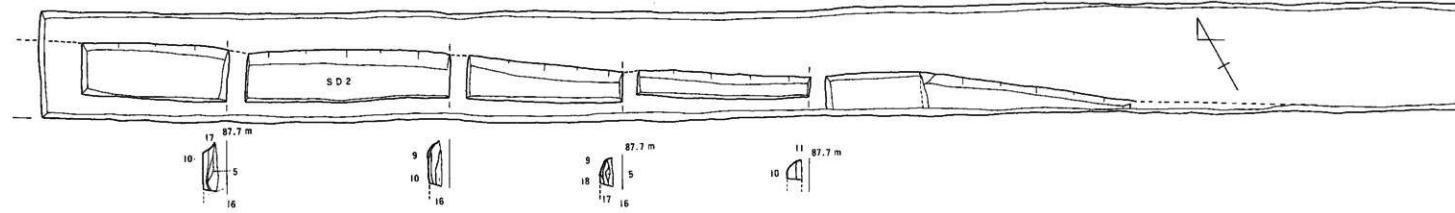
堆積土は灰褐色系粘質土で、SD 1 などと比較すると白っぽい感じを与えるもので、能登川町内では平安時代以降の特徴的な土層である。

出土遺物は、黒色土器塊（8）1 点に限られており、遺構の年代決定には乏しい資料状態である。ただその方向が、周囲に遺存する神崎郡条里の地割方向と一致することが、性格・機能の一端をあらわしていると言えようし、隣接現小川集落内には、中世佐々木六角氏の被官小川氏の館跡があることにも、関係するかもしれないが、今のところその性格付けは不可能である。



第3図 方形周溝墓実測図

T 8



T 8

- 1 耕土
- 2 淡灰褐色泥砂（青灰色粘土ブロック）
- 3 淡灰褐色砂質粘土
- 4 淡灰褐色砂泥
- 5 淡黄灰色粘质土
- 6 灰白色・砂質粘土（鉄分・黄色粘土ブロック含）
- 7 黄褐色砂質粘土（鉄分多量）
- 8 淡灰褐色泥砂
- 9 淡灰色粘质土
- 10 淡黄白色粘质土（灰色粘土ブロック含）
- 11 黄褐色砂質粘土（鉄分含）
- 12 灰白色粘质土
- 13 灰白色砂質粘土（鉄分含）
- 14 淡黄褐色砂泥
- 15 淡青灰色砂質土
- 16 淡褐色砂質粘土
- 17 淡褐色粘质土
- 18 淡黄白色粘质土（地山よりやや軟）
- 19 淡褐色砂質粘土 + 淡褐色粘质土
- 20 淡褐色粘质土 + 淡褐色粘质土（腐蝕物質）



第4図 T 5・T 8実測図

### (3)その他

T2~11・TC~fからは、明確な遺構の検出はなかったものの、T1・T2からは浅い溝状遺構が検出され縄文土器(2・3)の出土をみたほか、T2からは平面不整形深さ約50cmの土壌が検出され同じく縄文土器(1・4)が出土している。

## B 遺物

### (1)土器

縄文土器(1~5) 1は鉢の口縁部で、端部は屈曲気味に内湾して丸くおさまっている。外面に2条凹線がみられるが、縄文は観察されない。2も鉢で、その頸部であろうか。横位に2条の凹線をもち、その上位の凹線から右下方に同じく2条の凹線を引く。横位凹線から上部の外面には縄紋ではなく、下部は磨滅しているものの上部同様、縄文は施されていないようである。3~5は、口縁部外面に刻目突帯文のつくものである。3・5の突帯は口縁端部直下に付き、4のものは端部より約1cm下った所に付いている。また5の刻目は、へラ状工具で幅狭に刻んでいるものの、3は指頭で押圧したような形態を示し、4は大きなD字形を呈するものでバラエティーがある。

1・2は縄文時代後期、3~5は縄文時代晩期のものであろう。

### 弥生土器(6・7)

6は受口状口縁である。やや内傾気味に立ち上がる頸部は、がっちりした感じを与える。内傾した端部は、強いヨコナデのため凹み、同じく頸部内面も凹んでいる。

立ち上がり外面の下半部には、ハケ目原体による斜方向の刺突文が施工されている。

7は体部上半以上を欠いたもので、おそらく受口状口縁をもつ壺か壺であろう。総じて、器壁は薄く約3mm程度である。外面には細目のハケ目調整のあと、最大復径付近に波状文を施す。内面には高さ約3cmの所に、粘土継ぎ目が顕著に残っており製作工程の一端を示している。また体部中位の内面には、斜目方向のユビナデ痕が明晰に残っている。

6・7とも弥生時代後期のものであろうが、そのうちでも6は前葉に7は後葉に位置づけられよう。

黒色土器(8) 復元口径14.8cmを測る塊である。全体にやや偏平な器形をもつものと考えられる。口縁端部は尖り気味におさまり、内側に沈線が認められる。口縁部外面には強いヨコナデが施されている。

## (2)石器

石斧 (S 1) 磨製石斧の基莖部で、刃部は欠損している。材質は砂岩である。

石鎌 (S 2) 無茎凹基式の打製石鎌で、長さ 3cm・幅 1.8cm・厚さ 0.4cm を測る。

## C 小結

大半のトレンチからは明確な遺構検出もなく、出土遺物も少ない調査であったが、從来散布地としてのみ把握されていた三敷前遺跡にとっては、新たな資料を提供した有意義な成果を得たといえよう。

まず第 1 点は、方形周溝墓の検出は当該地周辺に墓域存在の可能性を示したものであるといえる。出土遺物に恵まれないためにその時期は限定できないものの、宮の前遺跡で弥生時代の集落が検出されていることと考え合わせて、今後の弥生集落立地に一材料を提示したといえよう。

第 2 点目は、縄文土器の出土が注目される。町内での縄文土器出土遺跡は今まで、大中の湖東・大中の湖南・舞子鼻 B 遺跡での出土が知られるのみで、すべて旧大中の湖辺に集中していたが、今回の発見により沖積地にも縄文時代の遺跡が立地する可能性が生まれることとなつた。

最後に条里制地割内「坪」のほぼ中央で検出され、条里制地割と一致する方向をもつ溝が、どのような性格をもつものであるのか。今回の調査はトレンチ掘りのため面的広がりの中で確認できなかつたが、今後の調査進展によって、その性格付けが期待されるものである。

## 4. おわりに

今回の調査は、工事用仮水路敷・排水路工事予定地が対象であったため線的調査となつた。またこの調査とほぼ同時に進められたほ場整備に伴う調査も線的調査であった。しかし、それぞれの調査のトレンチが直交する形となり、結果として三敷前遺跡全体に試掘トレンチを入れた格好となつた。したがつて、2つの調査結果を合わせれば、三敷前遺跡の概要となるわけであるが、遺構が密集していたり多量の遺物が出土するわけでもない。しかし面的広がりの中で旧環境の復元も含め、無遺構部分も遺構部分と有機的関連を持たせて、三敷前遺跡の全容を解明したいと思う。今回の成果を基礎に、今後の調査・研究に期待をしたい。

# 図 版



1 SD 1 梁出状况



2 SD 2 梁出状况



1 方形周溝墓検出状況



2 弥生土器(7)出土状況 (S D 1)



1 T 0168



02 T 0168



S2

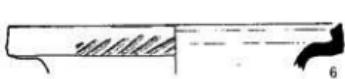
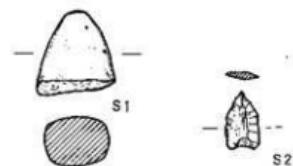


S1

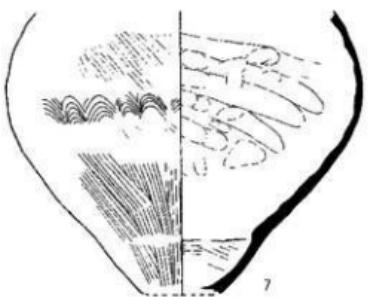
1 出土遺物（夾生土器・石器）



2 出土遺物（繩文土器等）



0 10cm



出土遺物実測図

## 三敷前遺跡発掘調査報告書

昭和53年3月

編集 滋賀県教育委員会  
発行 滋賀県教育委員会  
(財)滋賀県文化財保護協会

印刷 京都市下京区油小路仏光寺上ル  
有限会社 真陽社